

山田清三郎 著
近代日本農民文学史

上卷

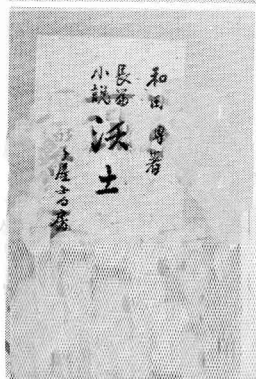
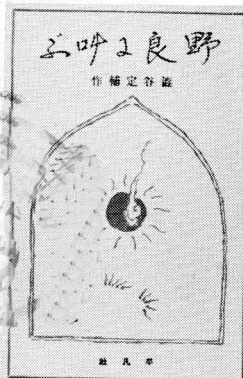


理論社刊

近代日本農民文学史

上
卷

理論社刊
山田清二郎著



山田 清三郎（やまだ せいざぶろう）

1896年 京都市に生まれる。独学。

1922年 伊藤恣とともに『新興文学』発刊。

1923年 『種蒔く人』同人。

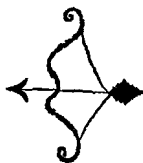
以後『文芸戦線』『戦旗』などの編集。

1939年 敗戦まで〈満州〉生活。

1945年 50年までソヴェト抑留生活。

「転向記」全3巻ほか多くの著作あり。

現住所 〒166 東京都杉並区和田 2-42-5



近代日本農民文学史 上巻

著 者 山田清三郎

制 作 小宮山量平

発 行 山村光司

発 行 所 理 論 社

東京都新宿区若松町一〇四
電話（〇三）五七九（代）
振替 東京九一五七三六

一九七六年九月

第一刷 〓 発行 ©

一九七六年初版

0091—50204—8924

はじめに

ここにいる近代日本農民文学とは、大正年代の後期になって、農民芸術・農民文芸・土の芸術などの名をもってあらわれ、それが農民文学という呼称に定着していった、その系譜にぞくするものと見られる文学のみでなく、それからのはみ出すものと考えられるものでも、地方農山漁村の自然と風物、そこに生きる人びとの姿態を、何らかの形で反映させ、ないしは作者がみずからその創造を意図した作品で、文学史的に、また社会史的、文化史的に考察の対象となりうるものを、できるだけ幅広く、包括してのものであること、その意味でこれは、狭義のまた厳密な農民文学史を、意図するものでないことを、まずことわっておかねばならない。

では、わたしは本書で、何を目論見、かつ自分に課した命題としようとしているのか？ つづめていうと、それは、日本の近代化に、その道をひらいた、明治の変革以後、日本帝国主義の誇大妄想による冒険が、敗戦・降伏を自ら招かねばならなかった太平洋戦争への突入前夜のころにいたるまでの、この期間——ほぼ半世紀における、わが国地方農山漁村社会の現実とその時代的変移、そしてそこに生き、また死んでいった人びとのさまざまな生活やその環境、その精神状況などを、文学はどのようにとらえ、えがいてきたかを、またどのようにしかとらえも、えがきもしなかったかなどを、いいかえるならば、この間の日本の近代における地方農山漁村社会——半封建的地主的経済制度と、資本主義の侵蝕、軍国主義の鞭のもとに、絶対多数の働く農民が、苦しみ悩まなけ

ればならなかった、地方農山漁村社会の歴史的推移の跡を、個々の作品をとおして、文学はどのように反映させてきたか、またどのようにしか、反映させることができなかったかを、確かめながら、その文学史的、また社会的、文化史の意味を考え、問いただしてみたい、ということである。

わたしが、この仕事に、心を動かされたのは、一九五四（昭和二九）年に初版本の刊行をみた、自著「プロレタリア文学史」上下二巻（理論社刊）を、書きあげたところからであった。——この「プロレタリア文学史」は、戦前刊行の自著「日本プロレタリア文芸運動史」（一九三〇年、叢文閣刊）、同じく「日本プロレタリア文芸理論の発展」（一九三一年、同上）の両著を、踏まえたものであるが、両著がともに、もっぱらプロレタリア文芸運動そのものの、史的跡づけの追求を試みたものだったのにたいして、「プロレタリア文学史」のほうは、プロレタリア文学の成立の必然性とその発展の経緯と軌跡を、広く近代文学との関連のなかに、検証することにとめた結果、これは一面、プロレタリア文学運動の終末までの期間を扱った、わたしなりの、近代日本文学史ともなったのだった。

そのなかで、わたしは、当然のこととして、前記のような広い意味での農民文学の、主要な作品についても、とりあげはした。しかし、その著の性質上、それはきわめて限られたものと、ならざるをえなかったのが、何とも心残りとなった。

近代日本文学のなかには、その草創期から、地方農山漁村に題材をとったり、それを背景にとりいれた作品が、決して少なくはない。また、農民そのものを主人公にとりあげたものも、かなり見出される。それらのものは、東京へ出て作家・文学者として世に立つにいった人びとの、出身郷土や生いたちやと、直接間接にかかわりあ

っているのが、例外はあるがほぼ通例となっている。

この点から見ると、それらの作品は、それぞれの作家の、出身郷土への告別の作であり、ないしは、断ちがたい郷愁の反映であるとも、いえるのかも知れない。そして、それはまたそれなりに、当の作家の研究にとって、興味ある素材を、提供するものでもある。同時に、わたしは、それらの作品からも、明治以来のわが農山漁村社会の現実の種々相、そこに生き、そこに死んでいった人びとの像と生態などを、そのとらえかた、えがきかたの問題は一応しておくとして、見出すことができたからである。

さらにまた、大正後期になって現われてくる、その名で呼ばれる農民文学、またプロレタリア文学運動が、その一部門としてとりあげるにいたった農民文学、これらについても、後者のほうは、その主要な作品について、おおむねとりあげたはずであるが、前者については、「プロレタリア文学史」では、やはり割愛せざるを得なかったのである。

この心残りが、胸にたくわえられていた時間は、短くはなかった。こんど『文化評論』に連載・発表の機会をえて、この仕事に着手することになったのは、少なからぬ近代日本文学史の著作にとりのこされている、この側面での欠落を、わたしなりに埋めたい願望とも、結びついでのことである。

さて、本書の叙述についてであるが、わたしは、各章を一定の史的段階に一応わけながらも、通史的方法にとらわれず、自分の文学的遍歴とも重ねながら、関連するエピソードなども織りこみ、読者の皆さんとの対話を、念頭におきながら、筆を進めてゆきたい考えである。皆さんの叱正と助言をお願いしておきたい。

*

本書は、以上の「はじめに」から稿をおこし、「近代日本農民文学史考」（副題——私の文学遍歴と重ねて）と題して、『文化評論』（日本共産党中央委員会発行）の一九七二（昭和四七）年七月号から一九七四（昭和四九）年十一月号までのあいだ、三回休載二六回にわたって連載執筆したものを、連載終了後、さらに検討を加え、補充と加筆の上、題名を「近代日本農民文学史」とあらため、既刊の「プロレタリア文学史」姉妹編として、理論社より上梓することとなったものである。

そんなわけで、本書は、『文化評論』連載中、津田孝編集長はじめ同誌編集部の人たちには、ひとかたならぬ世話になるとともに、また読者のかたがたからも、励ましと少なからぬ貴重な教示や助言をいただき、本書をこのようにまとめることができ、また上梓にあたっては、年月日や統計数字などの表現の統一、引用原文の旧字体や旧仮名を新字体や新仮名にあらためること、索引の編成、本の体裁その他のことで、理論社会長小宮山量平氏、同編集部藤井良氏の配慮と労苦をわずらわしたことをここに記して、感謝にかえたい。

一九七六年五月

著

者

目 次

はじめに	1
------	---

序 章 農民文芸の要求と一九二二年	11
-------------------	----

1 農民文芸運動の契機となったフィリップ記念講演会	12
2 『種蒔く人』と農民芸術	19
3 農民文芸の主張とその根拠	24
4 新興芸術講演会とヘインタナショナルの歌	29

第一章 自然・農山漁村を描いた明治期の文学

(一八九〇—一九〇〇)

1 明治維新と日本農民	38
2 農村を忘れた明治前半期の文学状況	45
3 広津柳浪の「小舟嵐」	50
4 「重右衛門の最後」にいたる田山花袋の作品	54

第二章

現われてきた農村社会と農民生活に

取材した作品(一九〇一—一九二二)..... 95

5	「たき木」にはじまる国木田独歩の一連の作品.....	59
6	島崎藤村の「野末ものがたり」から「藁草履」まで.....	67
7	徳富蘆花の「思出の記」と「自然と人生」.....	75
8	江見水蔭の「炭焼の煙」ほか二編.....	84
9	小栗風葉の「五反歩」と新田静湾の「出稼人」.....	87
10	この章のむすび.....	90
1	日露戦争をめぐる.....	96
2	川上眉山の一連の作品.....	101
3	小林蹴月、田口掬江、山口寒水の作品.....	108
4	木下尚江「良人の自白」と荒畑寒村「谷中村」もの.....	116
5	初の農家出身作家伊藤左千夫の作品とその世界.....	123
6	長塚節の「炭焼のむすめ」ほか二編.....	131
7	同じく「おふさ」「太十と其犬」そして「土」.....	137
8	北国情調を描いた小川未明の一連の作品.....	145

第三章

大正前半期の作品及び関連芸術・

文学論の台頭（一九二一—一九二〇）

9	中村星湖の「少年行」ほか	151
10	真山青果の連作「南小泉村」	157
11	石川啄木、正宗白鳥、国木田独歩の作品	164
12	島崎藤村、吉江孤雁、田山花袋、小栗風葉の作品	176
13	この章のむすび	186
大正前半期の作品及び関連芸術・		
文学論の台頭（一九二一—一九二〇）		
1	大逆事件前後の情勢	190
2	岩野泡鳴と吉田絃二郎の作品	193
3	中村吉蔵・秋田雨雀の社会劇	203
4	歴史的意義深い宮本百合子の三つの作品	210
5	「三人の会」と有島武郎のこと	217
6	加能作次郎と塚越亨生の作品	222
7	上司小剣の「空想の花」ほかと加藤武雄の世界	230
8	有島武郎の「カインの末裔」と「生れ出ずる悩み」	240
9	初めて面識をもった作家たち	246

第四章

勃興氣運を迎えた大正後半期の

農民文学（一九二一—一九二六）…………… 275

10	野村愛正、加藤一夫、神近市子の作品……………	249
11	新しき村にかかわる武者小路実篤の二編……………	257
12	藤村・花袋・星湖・白鳥・未明のこの期の作品……………	259
13	関連芸術・文学論について……………	268
14	この章のまとめ……………	271
1	幅広い作家の台頭……………	276
2	葛西善蔵、佐々木味津三、加能作次郎の作品……………	278
3	中西伊之助の作品と金子洋文の「地獄」……………	285
4	芥川竜之介、戸川貞雄、伊藤靖、菊池寛の作品……………	296
5	農民文学一途の新作家の出現……………	306
6	神近市子、小川未明、加藤一夫のこの時期の作品……………	309
7	加藤武雄、山村暮鳥、悦田喜和雄の作品……………	315
8	犬田卯と和田伝の初期の作品……………	329
9	仁科愛村の詩と短編……………	339

10	この時期の農民文学論と客観状勢……………	344
11	宮沢賢治、近松秋江、下村千秋の作品……………	352
12	森田草平、佐左木俊郎、渡部信義、中野正人の作品……………	362
13	藤森成吉の「北見」「新気運」「磔茂左衛門」……………	370
14	三つの記念碑的文獻……………	374
15	黒島伝治の一連の作品と細井和喜蔵の「奴隸」……………	378
16	高橋季暉の戯曲、五十公野清一の短編、伊藤恣の戯曲……………	386
17	中村孝助の「土の歌」と渋谷定輔の「野良に叫ぶ」……………	393
18	島崎藤村の「嵐」……………	401
19	この章のまとめ……………	403

△凡 例▽

- 1 農民文学史に主要な関連のある人名と若干の文献をその作品・評論について叙述してある個所に太字で示した。
- 2 作品名・書名は「」、新聞・雑誌名は『』を用いた。
- 3 年月日・統計数字は算用数字方式とした。
- 4 引用文は現代かなづかいに改め、新字体を使用した。また反復符「々」は用いたが、「ゝ」「／＼」は用いなかった。
- 5 本文・引用文を通じて聯は連を用いた。
- 6 索引は上・下巻を一括して下巻に付することとした。

(編集部)



土崎版・創刊号

- 1 農民文芸運動の契機となったフィリップ記念講演会
- 2 『種蒔く人』と農民芸術
- 3 農民文芸の主張とその根拠
- 4 新興芸術講演会とヘインタナショナルの歌

序章 農民文芸の要求と一九二二年

1 農民文芸運動の契機となったフィリップ記念講演会

近代日本文学の史的流れのなかで、土の芸術・大地芸術・農民芸術といったものにたいする、積極的な要望の声が高まり、それにもなつてその運動——農民文芸運動の気運が、動きはじめたのは、明治年代を過ぎ、大正年代も後期にはいった、一九二二（大正一一）年の秋ごろからであった。

そして、そのことを触発し、これにその契機を与えたものは、この年一月二日の午後、その没後十三年の忌日を期して、東京・神田・明治会館で開かれた、シャルル・ルイ・フィリップ記念講演会であったのは、たいへん興味ある史実といえよう。

わたしは、当日、都合があつて、出かけなかつたけれど、シャルル・ルイ・フィリップの会が主催した、この講演会のことは、前もって、よく知っていた。というのは、この講演会は、ちょうどわたしが、プロレタリア文学の商業誌『新興文学』の創刊号を、世に送り出したばかりのことであり、この講演会のことは、『新興文学』創刊号発行の前後を通じて、宣伝されていて、そのプログラムの印刷物も、もらっていたことと、この講演会の主催者が、『種蒔く人』の小牧近江でもあったからだつた。

この年、七月一五日に、日本共産党が、非合法に創立されていた。当時わたしは、もとよりこれを知る由もなかった。しかし、この一九二二年という年は、『新興文学』の創刊だけをとつても、わたしには忘れたくない年だつたのだ。

当時は小樽高商の学生だった小林多喜二が、毎月の懸賞小説に応募してきて、その作品の「健」や「藪入」が、

当選作として発表されることになるこの『新興文学』は、最初は、この年八月号かぎりで廃刊になった『小説倶楽部』（大衆的な文芸雑誌、民衆文芸社刊）を、この年二月からその編集部にいたわたしが、何とか復刊させようと奔走しているうちに、立野信之が、その母の従弟にあたる同郷（千葉県五井町）の地主伊藤^{とく}を説いて、出資と経営を引受けさせてくれたので、まったく新しく、プロレタリア文学雑誌として、創刊することになったもので、わたしはそのことのために、『種蒔く人』の同人たちとも、接触する機会をもつことになった。

そんなわけで、この年一〇月二日付から三回にわけて、『東京朝日』の学芸欄に、小牧近江が書いた「地から生れる芸術の要求」も、読んでいた。その冒頭で、小牧はこう書いていたのである。

この間の晩久しふりで、吉江喬松氏と会った。この十二月はわれわれの愛する社会主義作家シャルル・ルイ・フィリップの没後十三年に相当するし、それにフィリップを紹介した点に於て、オクタブ・ミルボウ、ジョルジュ・ソレルなどと関係の浅くないポオル・クロードル氏も大使として、ちょうど東京に居られるから、十二月を期して愛好の人たちが一夕、この天逝の作家のために、寄合いをしたいという話が偶然出た。

日本の農民文学運動に、そのきっかけを与えることになる、フィリップ記念講演会は、小牧近江と吉江喬松との間に、「偶然出た」この話から、発展したものであったのである。

ところで、この講演会について語る前に、わたしはその小牧と吉江について、小牧については『種蒔く人』のことにも及んで、紹介しておかねばならない。

小牧近江は本名近江谷駒^{こまき こんが}（一八九四—）、秋田県秋田郡土崎港（現秋田市）の出身、一九二〇（明治四三）年、東京・暁星中学を中退、衆議院議員だった父栄次にともなわれて渡仏、パリ法科大学を卒業、在仏中第一次世界大戦にあい、フランスの反戦運動の雰囲気にもふれる。戦後、かの地におこった、アンリ・バルビュス（一八七三—一九三五、代表作「砲火」「地獄」「クラルテ」など）主唱のクラルテ運動に参加、一九一九年に帰国。

クラルテ運動というのは、「クラルテ（光）は万人のもの」だとする信条から、再び呪われた戦争をくりかえさぬために、世界の思想家・文芸家が、国際的に手をつなぎ、平和と正義と真理のためにたたかい、フランスにあつては、反動的な反ボルシェヴィキ団体に対立して、ロシア革命の支持・擁護を旗印としたもので、その機関誌に『クラルテ』を発行していた。そして、一九一九年三月、モスクワで創立第一回大会を開いた第三インターナショナル（コミンテルン＝国際共産党）にたいしては、深い友誼と支持を、表明していた。

小牧は帰国すると、日本でのクラルテ運動を企画、一九二一（大正一〇）年二月、小学校での仲間だった金子洋文、今野賢三、従弟の畠山松治郎、叔父の近江谷友治、それに山川亮らを同人に誘って、雑誌『種蒔く人』を創刊した。

発行所は、東京・赤坂・青山北町小牧宅に、種蒔き社の看板をかかげ、ここに置いたが、印刷は小牧の郷里土崎港でおこない、フランスの画家ミレー（一八一四—一八七五）の、「自分は農夫のなかの農夫だ。自分の綱領は労働である」という言葉と、「種蒔く人」と題するかれの代表作の一部を、図案化したもので表紙をかざった。その表紙をもふくめて、わずか十八ページ、発行部数も二百部にすぎなかったこの、のちに『土崎版』とよばれる『種蒔く人』は、三号しか続かなかった。